



東九州支部報



50周年記念山行 (鶴見岳山頂にて・平成22年11月7日)

東九州支部創立五〇周年記念式典と記念講演会が、昨年の一
月六日(土)午後二時三〇分から、大分市府内町の「コンパ
ルホール」で開かれた。式典と講演会には支部会員・会友はも
ろん、全国各支部からお祝いに駆けつけてくれた会員のほか、
一般参加者も交えて二六名の参加をみた。また、それに引き
続いて午後六時から同市府内町「大分センチュリーホテル」で
記念祝賀会も開かれ、会員、会友、全国各支部からの参加者を
交えて、盛大なパーティとなった。さらに、翌日(十一月七日
・日曜日)は記念山行が行われた。場所は鶴見岳で、これにも
会員・会友はもちろん、前日の祝賀会に参列した全国各支部の
参加者や、新聞などを見て応募・参加してきた一般参加者も交
えて八六名という大きな団体となり、楽しい、盛大な登山大会
となった。そして、これらと併行して同じ「コンパルホール」
市民ギャラリー」では、十一月五日から七日にかけて『登山資
料展示会』も実施され、多くの会員から提供された資料がたく
さん展示され、訪れた人たちの目を引いた。

なお、これらの行事は大分県・大分県教育委員会・大分県山
岳連盟の後援のほか、大分合同新聞社、NHK、OBS、TO
S、OAB、FM大分のマスコミ各社の後援を受けての実施で
あった。

五〇年という半世紀の歴史を積み重ねた当支部が、その記念
の事業を支部組織を上げて実施しようと、平成二〇年の定期総
会で決定して以来約一年半をかけて準備してきた事業は、この
ほかにも、海外遠征登山隊派遣や、国内山行、記念誌の発行な
どもあった。これらの事業の趣旨はいうまでもなく、五〇年と

記念行事大盛會に

支部創立五〇周年を迎えて

《 も く じ 》

支部創立五〇周年を迎えて	1
記念式典準備	2
記念資料展示会	2
記念式典	2
記念講演会	3
記念祝賀会	4
山に想う	4
記念山行	5
山行各班からの報告	6
記念誌編集を終えて	7
附 大分合同新聞記事(写)	8
記念事業の実施概要	9
アルバム	10

どがあつた。これらの事業の趣旨はいうまでもなく、五〇年という歴史の節目を記念することであり、会員、会友がこれを契機に今後の飛躍を意識する場でもある。

同時にまた、これら事業の展開を広く一般にも周知してもらうことにより、登山に関する一般の関心と参加を促す目的もある。こうした意味で、記念講演会や記念山行への一般参加者がたくさん得られ、また、記念事業で実施した海外遠征登山にも一般参加者がいたことは意義多いことである。

記念式典準備

一月六日(土)午前一〇時過ぎ、大分市府内町・コンパルホール三階の多目的ホールに、東九州支部の会員が三人、五人と集まってきた。支部員は全員、この日のために作



た支部のマークの入ったグリーン(女性はダイダイ色)のパーカーを羽織っている。会員等はホール隣の倉庫から椅子運び出す作業から

始める。ステージを組み立てる作業が始まる。机や椅子の配置。椅子は当初横に一五脚並べていたが、横のゆとりが狭いと、途中から一〇列に替えて並べていく。梅木支部長がステージ上に取



り付けの横幕の高さを調整している。講師紹介の垂れ幕を後ろのパーに取り付けて高さの調整・・・など

資料展示会

と、ホールは動く人影であわただしい。横の方では受付のテーブルを並べられていく。出席予定者名簿を並べたり、配布資料や記念品を置いた箱を並べて、受付の準備を始めている。

一年以上前から準備してきたのはほとんど今日の日のためだ。午後二時半開会の記念式典、それに引き続く記念講演会。終わると夕方はセンチュリーホテルで祝賀会だ。その間には講演会終了後は、このホールで出席者全員そろっての記念写真撮影の準備もある。

受付はまず支部員の会員・会友そして全国各支部からの来訪者。受付で渡す袋には、今日の行事のしおり、明日の鶴見岳山行のしお

り、記念品の袋、発行したばかりの五〇周年記念誌、その他、大分県・大分市・別府市・由布市などの観光パンフレットなど・・・。その横には一般参加者の受付もある。一二時にはおおむね会場設営を終了。メンバー全員いったんホール中央に集まってミーティング。支部長が「いよいよ本番、みんな協力して成功させよう」とあいさつ。午後の本番の手はずや、各々の任務分担などを再確認して昼食に散る。大分駅前には講師の石川氏を迎えに行くメンバーも出て行く。

前日の五日(金)、同じコンパルホールの二階、市民ギャラリーには九時過ぎから支部員が次々と集まってくる。ここはその日から七日(日)まで開かれる「登山と文化」登山資料展示会の会場だ。入れ替わり立ち替わりするメンバーは一人にのぼっている。がらんとした会場に、展示される資料が、あとからあとから運び込まれてくる。

ギャラリールームの隣の倉庫から、展示台にする机や台を運び出し、展示物を吊すフックや鎖などが取り付けられていく。一九六五年のヒンズクシュ登山の記録の古い写真やエベレスト登頂など、ヒマラヤの写真、あるいは山の絵画

や版画などがボードに架けられていく。山に関する古い書籍類も運搬箱の手の届く、机の上や台の上には、古いピッケル十数本をはじめ、カラビナやハーケン、ザイル、その他古い登山道具関係。わかんやアイゼン、キスリングザック、靴、スパッツ、ニッカーズボン、ニッカーホース、ヤッケ、果ては、とある高校山岳部のネームの入った古く歴史を感じさせるものばかりだ。中央では古い屋根型のテントに張られていく。その前には高所登山の服装をマネキンに着せて見せている。これらは屋前には並べ終えられ、そのころにはもう、二人、三人と見物者の姿も見え始めている。



記念式典開会へ

六日午後一時を前に、廊下の向こうから一人の中年男性が、いかにも山男風に、さりげないスポーツシャツと浅いひさしのハット姿、手には小さなカバンを持っている。「こんにちは。〇〇支部の◇◇です」受付第一号だ。名簿をチェックし、記念集会資料と記念品などを渡す。「開会までまだ大分時間がありますので、二階の市民ギャラリーで登山資料展示会を開いていますので、どうぞご覧下さい」受付の支部員が説明する。その少

記念式典の開会



し後に七、八名の一人がホールに入ってきた。団体の第一陣は◇◇の支部だ。やがて、受付の役についていない会員や、会友が三、三、五、五顔を見せ始め、他の支部からの会員も次々と姿を見せてくる。二階の資料展示会場も急ににぎやかになってきた。受付をすませた県外組が見に来ている。

午後二時三〇分ちょうど、飯田

加入促進に向けていつそうの会の活性化が必要となっている。その基礎をなすのが支部の活性化で、全国各支部でいろいろ工夫ある活動が模索されている。登山というものをより楽しく、安全なスポーツとして広げ、若者が喜んで参加できるようなものにするため、東九州支部のさらなる活動と発展を

登山のあり方を追求する場としたという、気持ちを実施して、これまで取り組んできた支部活動を基礎にして、この記念行事を次の半世紀への飛躍台にした。い」とのべた。そして、本部代表あいさつでは、会長代理で出席した神崎忠男副会長が「日本山岳会が高齢化と、若年会員の減少という実態の中で、若手会員の

（あいさつする梅木支部長）



（あいさつする本部代表神崎副会長）



期待したい」とあいさつした。また、来賓として出席した後藤利雄大分県山岳連盟会長は「大分県の登山活動に大きな功績を残した当支部の活動は立派な遺産である。今後はいつそう幅広く、会員以外にも影響のある活動を展開し、安全登山や自然保護などのあり方を広め、県下の登山活動の発展に



（祝辞をのべる県岳連後藤会長）
つそう寄与して欲しい」と述べた。祝電が二通披露され、このあと、現存会員で唯一、五〇年以上の会員歴を持つ橋本祥家氏に、支部から永年会員表彰を贈った。氏の果たした大きな功績に対して出席者の万雷の拍手が贈られた。
（永年会員表彰）



記念講演会へ

記念式典は二〇分で終了だ。引き続き記念講演にはいる。最初は本部会長代理であいさつした神崎副会長の講演である。題して「日本山岳会と私」

（講演する神崎副会長）



日本大学の山岳部時代からの登山と探検の秘話が披露され、その中では、グリーンランドへの探検と登山の逸話は興味深いものであった。それに続く話題で特に、北極点ヘトライは、植村直己氏との競争などの臨場感ある話が聴衆の気持ちを引いたようだ。

次は石川富康氏の「美しき七つの峰」と題して、ギネスブックにも登録されている、最高齢で世界七大陸の最高峰を登頂した記録の話だ。前段は、氏が若いころから



山へのめり込んでいき、エベレストをはじめ、八千メートル級の山々に挑戦してきた中、その経験の中でいくつかの逸話が披露された。そして、次第に年をとってきた中で一つの挑戦として挑んだのが、七大陸の最高峰登頂で、これらの山々に挑んだ逸話が話された。



(講演する石川氏)

記念祝賀会へ

記念講演会は午後五時一〇分に終了した。その後、一般聴講者が退場したあと、JAC関係者だけで記念撮影。そして、そのまま会場をすぐ近くの「大分センチュリーホテル」へ移して記念祝賀会だ。午後六時に一五五分前。会場の「大分センチュリーホテル」二階の桜の間は、一〇のテーブルが並べられ、各テーブルには山の名前



山に想う

橋本 祥案

五〇周年記念式典の栄えある場で、永年会員として表彰されたことを誇りに思うと同時に、身にあまる表彰に感謝します。

私はよく山に登ります。好きだから、低い山、高い山、近くの山、遠くの山など、山の喜びは山頂に立った時が最も大きい。しかし、私は険しい山道、坂道等苦しいが、一步一步踏みしめて登る時が「自分を知る」時だと思ふ。

「雪の尾根 樹々輝きて 年あらたまると、この句は久住の雪山に登った時のものである。春、夏、秋、冬、何と何時、何回登っても、その日、その時、しれどれ違った味を感じ、心に深い感動をおぼえる。山に登り、野を歩き、自然の中に小さな自我を見出す。山や海、それぞれ心や物の準備が必要で大切なことを忘れないでほしい。ひとり歩きもよいが、危険がともなうことを忘れないでほしい。「命の尊さ」を忘れないで、「安全登山」をしてほしいと思います。

雨やみて

遠くにかすむ高峰の
山の尾根見ゆ 午後ひととき

がつけられている。最前列中央にあるのは九州の山のシンボル久住山で、そのほかの名前もみな大分県にある一等三角点の山々。その中で一つだけ違うのがある。翌日登る鶴見岳(三等)だ。会場に次々と、コンパルホールから参列者が移動してくる。入り口では、胸につける名札と会場の着席表が配られている。

午後六時、いよいよ祝賀会の開宴。加藤会員の司会で始まり、梅木支部長が歓迎のあいさつ。続い



て乾杯の音頭は、遠来のお客の中では最古参のひとりで、一昨年秩父宮賞受賞した福岡支部の松本征夫氏が指名された。乾杯のあとはしばし料理とお酒と歓談の時間で、司会がドレスアップした西(あ)



会員に代わりるとアトラクションの開始である。ステージ上に上がったのは、お揃いのブルーのブレザージャケットを着た男性陣、今宵の出し物に



依頼した『男声合唱団・南蛮コーラス』の五人である。中にひとり見覚えの顔は、司会していた加藤会員。ピアノの伴奏に合わせた滝廉太郎作曲の『花』を皮切りにポピュラーや演歌や童謡や山の歌などの合唱を八曲、約二〇分間の熱唱披露であった。

祝宴はさらにたけなわとなつてきて、お祝いに駆けつけてくれた各支部が、順番にステージに上がり、出し物やらスピーチやら・・・。そして、五〇周年記念記念の海外登山隊として参加したメンバーが壇上で紹介されるなどが続き、終演の時間となる。最後は最年長会員の橋本祥案会員の音頭で



(海外山行隊の紹介)



壇し、お返し『東九州支部万歳』でお開きとなった。



記念山行

晩秋の鶴見岳へ

七日(日)朝八時前、大分駅前を出発したバスは中型二台。一台は山行コース用、もう一台は観光コースだ。観光は人数も少ないのでマイクロバスの予定だったが、バス会社の手違いで中型が来た。

二台のバスは大分駅から乗る支部員を乗せてセンチュリーホテルへ。ここで県外からのお客を乗せて出発した。観光コースは高崎山へ、山行組は大分ICから別府へ向かう。そのころすでに、今日の山行、鶴見岳の登山口となる権現社駐車場には自家用車組が次々到着していた。

午前九時、広い権現社駐車場は自家用車と登山者の姿で埋まってしまった。ここで、A班(リーダー加藤会員、サブリーダー中野会員)、B班(リーダー星子会員、サブリーダー下川会員)、C班(リーダー安東会員、サブリーダー佐藤(秀)、木本、渡部会員)と、登山者名簿で振り分けられた班編制を整え出発の準備。最初に山行の総合リーダーの野村会員が「紅葉も見頃で、ほどよい天気。気をつけて楽しく登りましょう」とあいさつ。

出発準備の整ったA班から順次出発する。C班は、昨日参加申し込みした人など、一般参加者が八人にもなつて、人数も増えたため点呼も慎重に行つて、一足遅れて(山行出発式)



移動する。三角点をかこんで、木山会友の書の横幕を真ん中にして、全員そろつて記念写真撮影。取材のために登つてきた大分合同新聞社の記者もカメラを構える。(この写真と記事は十一月一日の別府版に載せられた)

山頂はあいにくの曇りと霧の中で、展望はなかったが、暑くも寒くもなく、ちょうど良い気温。全員そろつて万歳を行つて、一二時



九時二〇分に出発。権現社を経由して登っていくと、林道を横断する。ここでは救護担当の大林会員が車を待機させて非常事態に備えている。南平台分岐を経て山頂直下の小広場に一一時四〇分頃、全メンバーが登り着く。早く着いた組はもう弁当を開いている。みなそれぞれ、あちこちに座つて昼食タイム。北九州支部の日向氏が持参し担ぎ上げたシヤンペンがみんなに振る舞われ、広場は大賑わい。そばを通過する一般登山者は驚きながら見て行く。一二時一〇分、先に着いていた観光チームと合流するため山頂へ

来訪者も県内組もバスや自家用車でそれぞれが帰途についた。

(文責 飯田)

各班からの 山行報告

A班 中野 稔
(13997)

薄曇りの一日で、山頂部は霧の中であった。思えば三年前から企画し、役員が役割分担し常時十名近くが活動して、一年前からは具体的に行動を起こし、青写真を実際の目に見える物へと変えてきた。何事も紆余曲折はつきもので、記念山行と同様に無事に成功したこと、参加者全員に対して感謝したいと思う。

A班は本州と福岡県の各支部からの参加者で、遠路はるばる来県してくれた方々の登山に対する、純粋な真心と真摯な情熱を生む精神に触れたことで、東九州支部の方々の、山への憧れと畏敬の念が今まで以上に強くなったと思う。

九時過ぎに駐車場を出発し、権現社本殿にて本日の登山の安全を神様をお願いして、山頂部の展望台を目指した。所々に登山道に海岸から登る一気登山の案内板がある。二三回目と言う事は、平成元年あたりが初回度と言う事を語つ



ている。歳月は様々なものをのみ込み、変化させてゆく様に、登山の在り方も変わってゆくに違いない。

ほぼ予定どおり、十一時半頃山頂部の展望台につき、昼食と写真撮影会としはしの歓談を楽しみ、観光組みの待つ山頂へ歩いて二、三分。霧がなければ、由布岳の雄姿が見えたはず。ちよつと遅いが、まだ紅葉も残っており、遠来のお客にその素晴らしい景色をお見せできなかったのが残念。全員で集合写真を撮り、十二時半には次の目的地、南平台を目指して下山。

四十分余りで到着。由布岳と鶴見岳の展望台で登山客もそれなりに沢山来ている事は、良く磨かれた登山道が物語っている。

ほぼ予定どおり、出発地点の駐車場に三時前に到着。解散式を執り行い三々五々流れ解散となる。

それぞれ新しい出会いと次の山を目指し旅立っていった。

B班 下川 幸一
(14504)

歩きはじめてすぐに神社の社務所があり、横の苔むした石段を上がったていくと、神社の下に清めの水場があり水を補給。C班の安東桂三さんが「別府で一番おいしい水です」と説明している。さらに進むと御岳権現社に到着し、登山の安全祈願をする。本殿の左手奥に登山道の標識があり、登山道に入る。やや急なジグザグ道を登ると、一〇分くらいでベンチのある広場があり、尾根道に出た。自然林と檜の混成林の中、緩い斜面をゆつくり進む。林道を横切つて杉林をさらに登ると、やがて道が左右に分かれている。左は南平台に続く南平台分岐点である。ここで小休止して水を補給。

B班の星子リーダーはヴィスタリー、ヴィスタリー(ゆつくり、ゆつくり)のペースで先導し、何度か立ち止まって「登山時の基本の励行」について皆に説明、実技指導をしている。

①ゆつくり歩く ②水と食の補給 ③腹式呼吸の指導 ④トグル歩行 ⑤ストックの握り方等、二班グループ全員が熱心に聞いていた。一〇時二〇分に南平台分岐点を右にとり、鶴見岳へ直進する。はじめは緩やかな登りだが、次第に

坂が急になり本格的な登りになる。山さん、ありがとうございました。山頂では、あいにくの濃霧のため周囲のすばらしい眺望がきかず本当に残念であった。

今日の下山コースは、馬ノ背から南平台、踊り石経由で登山口の予定だ。NHKの鉄塔の脇から「赤池」と呼ばれる平坦地へ灌木の中を下り、「馬ノ背」を左折して下り続ける。途中でB班の宮崎支部の女性会員が大腿筋を痛め、救急隊の大林さんが緊急の手当てをする。その間、星子リーダーが「水の飲み方」や自身が考案した「トグル歩行」を解説している。

そこでは、先着のA班が昼食のお弁当を広げてうまそうに食べている。我々も昼食タイムとする。お弁当はボリュームもあり、おいしくて大好評!! C班到着で全員が揃った時、北九州支部の日向さんが大きなボトルの極上のシャンパンを取り出し、全員に注いでくれた。一同乾杯をし、おいしくいただく。おかわりの人が何人も出る程であった。

楽しい昼食を終え、山頂目指してスタート。赤いレンガの遊歩道を登っていき、鶴見岳(1375m)山頂に二時一五分到着した。山頂では観光チームが既に着いており、さっそく全員揃つての記念撮影をする。加藤英彦さんの発声で「東九州支部創立五〇周年」の万歳三唱、続いて西事務局長の音頭で今西錦司先生を偲んで、恒例の「ヤッホー」の大合唱の締め。

会友の木山広喜さんの力強い横断幕が一段と盛り上げてくれた。木



のメンバーから歓声があがる。また登山道は落葉が厚い絨毯となり、

歩くたびに柔らかなクッションが
気持ち良い。

南平台到着後、女性負傷のため一〇分間の時間調整をし、「踊り石」へ進む。この後急な下りの連続で負傷の女性のフォローで先頭と大きく差がつく。

一四時一〇分に「南平台分岐」

トの駐車場に到着。到着と同時に

C班 木本 義雄

(2019)

鶴見岳御嶽権現神社駐車場広場で、野村リーダーのあいさつのあと準備体操、A班から順に出発する中、「C班」のリーダー安藤さんが丁寧に参加者の点呼を行う。この班は県内支部員だけだが、そのほかに、新聞を見て今日飛び入りの人も含め、一般参加者が八名もいるからだ。

全員で二五名、九時二五分一足遅れて出発。苔むす参道を「火男火売（火の神の）神社」に向かう。神社で参拝中のB班に追いつく。本殿参拝後、神社左手から標識に従い山頂に向かう。途中「林道出合い」と「踊り石・南平台分岐」で、紅葉を見ながら休憩する。

登りが急になると人数が多いので長い列となつて山頂をめざす。一般参加者の人たちはみな女性で、かなり登りなれた人が多く、元気が良い。

一二時一五分、鶴見岳山頂の南下山口に到着。この広場で先着のA班、B班と合流。ここで食事。昼食後は霧で視界が悪いし、山頂でロープウェーで来た観光組が待っているために山頂に向かう。

山頂も霧に覆われていたが、本部来賓・各支部会員・東九州会員、一般参加者の全員集合写真。そして各々の交流写真を撮り、今後の再会を願う。

一二時三〇分、A・B・C班ごとに「馬の背」経由で下山を開始

した。一二時四五分「馬の背」通過時、「鞍ヶ戸」南面の霧が上がり、素晴らしい紅葉であった。一三時〇二分踊り石・南平台分岐を通過。一三時二八分南平台到着。

休憩時に登山中に必要な水分の摂取量についての話題。B班の星子リーダーが「必要量として、体重×20×行動時間÷2の水分（cc）が目安」と説明。安東リーダーが「私の場合は体重×行動時間×2が目安」と。星子リーダー「答えは同じだよ。計算しやすい方をとれば良い」で笑い。

休憩の後下山再開。スギ林の中の火山灰でぬかるんだ下山道を「踊り石出合い」に向かう。一三時五十分踊り石通過。一四時一二分、登山道南平台分岐点到着。野村リーダーが下山して来る各班で

日本山岳会東九州支部創立五〇周年記念誌の編集を終えて

安東 桂三 (9193)

平成二年三月三日、東九州支部の役員会が開催され、梅木支部長、西事務局長をはじめ、一〇名の役員が集まった。議題は、支部創立五〇周年記念事業と二年度支部定期総会についてであった。この席で、五〇周年記念事業の担当が決定された。記念誌の発行が必要。私は、三〇周年記念誌、四〇周年記念誌と編集にかかわり、今回は、どなたかに、この記念誌の作成をお願いできないかと考えていた。五〇周年と言え、二分の一世紀である。この区切りの記念誌を作成するには、自分にとって、能力不足と考えていたのだ。

だが、西さんの一声、「記念誌は桂三」で、担当が決定された。内心は、大変な役を引き受けてしまったであった。だが、誰かが引き受けねば、発行できないと、原稿を集めることにした。

五〇年と言う長い年月の区切りの記念誌。創立期のことも記したい、また、五〇年間の記録も記したい、会員全員に、何か文書を書いてもらいたい、いろいろと考えた。創立期から、現在までの事は、梅木支部長にお願いしよう、会員には、四月一八日の定期総会で原稿依頼しようと考えた。

支部長には、『仮題五〇周年の歩み』と言う題で、原稿を書いてくださいと口頭依頼し、総会出席会員・会友には、文書で原稿依頼をした。でも、原稿締め切り日がせまっても、会員には、まだ、五〇周年は先のことと思つてか、原稿提出をすることはなかった。二年度の忘年会の場で、原稿依頼文書も渡した。

そして、年がかわり、平成二年。原稿が集まらず、支部役員へ、『役員は一文は、必ず書いてください』と依頼。また、海外登山や海外トレッキングに行ったと推察される会員へ、電話で詳細を聞いたり、訪問して依頼したり、ハガキで原稿督促したり。そして、二二年の支部総会で、再度原稿依頼。製作スケジュールの見直し、手書き原稿のリライト、古いソフトで送ってきた文書の取り込みに苦労したり、スケジュールが、後へ後へとずれ込んでいった。

でも、九月には、大体の体裁が出来あがり、再度の見直し、数人の役員による校正チェック、一〇月始めに、校了となり、多少の手直しのと、十一月四日、やっと、出来あがった。

五〇年の区切りの記念誌、原稿を書いていただいた会員に感謝しています。この五〇年の区切りに、新たな東九州支部の活動が活発になりますようにと願っています。



は、読む人の評価にお任せだが
 ・・・読み返してみたいし
 ・・・臨場感はないなあ・・・と思
 っ
 つ
 つ

※この号外に掲載の
 写真(巻末のアルバム
 を含)は重廣氏及び中
 野・飯田の提供によ
 るものです。

大分合同新聞の掲載記事

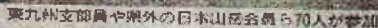
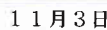
○ 会員六八名のうちに、二日間の五つの行事のうち、一つでも参加した会員は四四名であった。二四名がまったく参加がなかった。会友においてはさらに参加

○ 式典での本部神崎副会長のあいさつにもあったが、「支部活性化」……。そのためにはやはり、メンバーがいかに支部の旗のもとに結集するか。支部のいろんな活動に、いかに多く支部員が参加し、集うかが最大の課題と考える。

○ そんなことを思っていたら、この特集号を、できるだけ臨場感を持たせ、参加できなかった会員・会友にその模様を伝える事が必要と考えた。

○ 何処まで、臨場感が出せたか

11月7日



11月10日

五〇周年記念誌の頒布

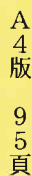
五〇周年記念誌の残部がありますので頒布します。みなさんは非購入のうえ、友人や同好者に贈ってあげて下さい。

一部：一〇〇〇円

(但し、記念誌原稿執筆者に限り

一部：五〇〇円とします)

希望者は安東桂二(090-5727-9472)まで



50周年記念として実施した事業の概要

1. 記念行事

① 記念式典

と き…11月6日(土) 午後2時30分より
ところ…大分市コンパルホール「多目的ホール」

② 記念講演会

と き…11月6日(土) 午後3時00分より
ところ…大分市コンパルホール「多目的ホール」

講師と演題

日本山岳会 副会長 神崎忠男氏
『日本山岳会と私』
日本山岳会員・愛知県山岳連盟会長 石川富康氏
『美しき七つの峰』
(世界最高齢者で七大陸の最高峰登頂の記録)

参加者…式典及び講演会

支部会員36名、会友15名、全国各支部よりの参加者35名、
一般参加者26名、 計112名

③ 記念祝賀会

と き…11月6日(土) 午後6時00分より
ところ…大分センチュリーホテル
出席者…会員32名、会友13名、全国各支部よりの参加者35名
計80名

④ 記念山行(登山会)・観光

と き…11月7日(日)
登った山…鶴見岳(鳥居登山口～権現社～鶴見岳山頂～馬ノ背～南平台～権現社～鳥居登山口)
参加者…支部会員24名、会友11名、全国各支部よりの参加者24名、
一般参加者8名、計67名
観光…高崎山自然動物園、別府ロープウエー、志高湖
参加者…6名

⑤ 記念資料展示会

と き…11月5日(金)～7日(日)
ところ…大分市コンパルホール「市民ギャラリー」
テーマ…「登山の歴史と文化」
展示物品…古い登山・登はん道具や野営道具、古い登山用装備・服装、高所登山の装備・服装等
特殊道具関係などの道具・器具・装備など約400点、そのほか山に関する書籍類約80冊、
絵画類10点、写真等約30点、古い国土地理院の地図等古地図関係約40点、その他
観覧者…延べ約400名

2. 記念誌の発行

編 纂 A4版 95頁 発行日 11月6日
発行部数 310部発行

3. 記念海外登山隊派遣

期 日…10月5日～10月25日
行き先…ネパール・「カラパタル峰」
参加者…会員5名 一般参加者5名
合計10名

4. 記念国内山行

大峰山系(山上ヶ岳、八経ヶ岳) 7月16日～19日 参加者5名
南アルプス(北岳) 8月13日～15日 参加者3名
北アルプス(槍・穂高縦走)・南アルプス(赤石岳・聖岳) 9月17日～24日 2名
北アルプス(奥穂高) 10月8日～11日 参加者2名



記念式典及び講演会

五〇周年記念式典・講演会・祝賀会・記念山行アルバム



記念祝賀会での各支部の競演



福井支部



本部と多摩支部



京都支部



富山支部



東海支部（石川夫妻）



関西支部



北九州支部





熊本支部



福岡支部



宮崎支部

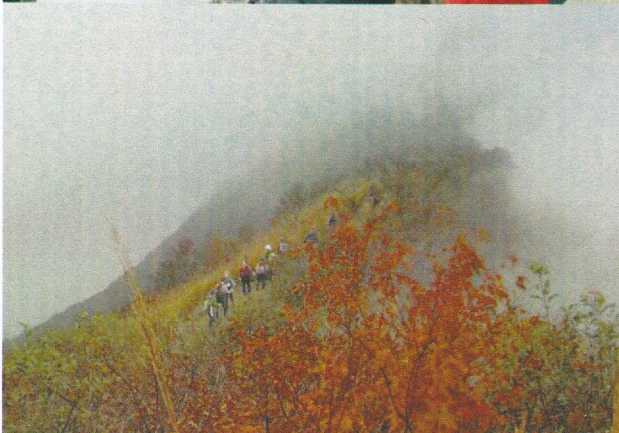
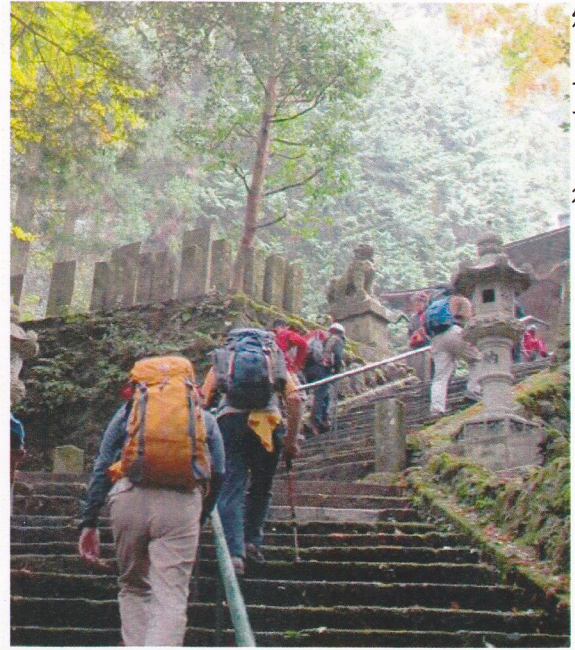


坊がツル賛歌を語る松本氏と支部長

東九州支部の坊がツル賛歌



鶴見岳山行



登山資料展示会

